

現代メキシコ社会における先住民アイデンティティのゆくえ —オアハカ州の ASARO によるストリートアートを用いた「先住民」の再生産—

The Future of Indigenous Identity in Mexico

— Recreation of the “Indigenous” through the Street Art by the Practice of “ASARO”

山越 英嗣 (Hidetsugu Yamakoshi) 指導：蔵持 不三也

序章

スペイン植民地期を経て複雑な混血化が進む現代メキシコ社会において、先住民は形質的に区別し得る自明の存在ではなく、むしろ社会・政治的な構築物である。メキシコ革命以降、先住民は、国家の形成・運営のための資源として活用されてきた。たとえば、1948年に設置された国立先住民庁は、先住民を「メキシコ国民」として国家に統合されるべき存在であるとする統合政策を進めた。多文化主義が謳われる現代のメキシコにおいても、先住民が独自の慣習と世界観を生きる共約不可能な存在であるという理解は依然として根強い。しかしながら、近年このような状況は変化しつつある。インターネットなど情報技術の普及が進んだ1990年代以降、サパティスタ民族解放軍の蜂起に代表されるように、先住民アイデンティティを主張する者たちが、自らのイメージを再構築し、世界に発信しようとする機運が高まりをみせている。

本稿は、メキシコ南部の小都市オアハカにおいて、このような社会的に構築されてきた先住民イメージを、壁画やステンシル・アートといった、いわゆるストリートアートの表象行為を通じて脱構築しようとする若者アーティストたちの活動を事例とした。オアハカにはストリートアートを実践する集団が複数存在するが、本稿ではオアハカ革命芸術家集団(Asamblea de Artistas Revolucionarios de Oaxaca、以下、ASAROと表記)の活動を中心とした。

第一章

1980年代以降にメキシコ政府が新自由主義的な政策への転換を余儀なくされると、農村の疲弊がいつそう深刻化し、オアハカにおける制度的革命党(PRI)の支持率は急低下していった。2006年に起きた抗議運動も、制度的革命党に所属する州知事への不満が爆発したものと考えられる。民衆が、州知事の辞任を求めてさまざまな抗議活動を行うなかで、先住民アイデンティティを有する若者たちがアート制作技術を用いて運動に参加しようと結成したのがASAROであった。彼らは、これまで為政者たちが用いてきたような先住民出身のメキシコ革命の英雄たちを民衆の統合シンボルに用いた。これは一見、人類学者クラウディオ・ロムニッツがいうように、グローバリゼーションへの

対抗的現象としてのナショナリズムの高揚と解釈できる。しかしながら、彼らの描く作品を分析すると、必ずしもそのように結論づけられない。ASAROの作品に取り入れられている欧米のサブカルチャーのイメージは、彼らがメキシコシティや米国へ仕事を求めて移住したさいに現地で見聞した経験がもとになっており、むしろグローバリゼーションが、オアハカの若者たちの価値観に大きな影響を与えているのである。そして、彼らの作品の英雄たちは国家がナショナルヒストリーにおいて描いてきたものとは異なる「物語性」のもとに創作される。たとえば、メキシコ革命の英雄エミリアーノ・サパタは、革のジャンパーを着て髪型をモヒカン・ヘアにした姿で描かれ、背後にはコココーラの缶と「革命(revolucion)」という単語がみえる。ナショナルヒストリーにおいて、サパタは農民の権利獲得運動に邁進した人物として描かれる。しかしながら、ASAROの描くサパタはポップアートを援用することで、資本主義や新自由主義を批判している。また、「メキシコの最後の晩餐」というタイトルの作品は、テーブルの上の皿に銃弾を受けたオメキシコ初の先住民大統領であるベニート・ファレスの頭部が描かれている。原画のキリストの位置には麻薬組織のボス、そして周囲にはサリナス元大統領をはじめとして、いずれもメキシコの権力者が描かれている。ナショナルヒストリーでファレス大統領は、メキシコをフランス侵攻から救い、レフォルマ(改革)を断行した功績が描かれるが、ここでは新自由主義のもとでの成功者たちがベニート・ファレス大統領の理念を「殺して」しまったことが批判的に描かれている。

メキシコでは、1920年代からの壁画運動に象徴されるように、制度的革命党が壁画や彫像などを公共空間に設置してナショナルヒストリーを可視化し、国民が国家の庇護のもとにあることを知らしめるような政策を取ってきた。それに対して、本稿で紹介したストリートアーティストたちは、米国などへの移住の過程で得たサブカルチャーをもとにして、自分たちの世代の価値観で再解釈した英雄や先住民像を描き、ナショナルヒストリーと異なる物語性を産出したといえる。

第二章

ASAROの思想を読み解く鍵概念として、筆者はスペイン語の「プエブロ」という語に着目した。プエブロは、オアハカにおいて「民族的な固まり」や「国を表わす語」として認識される。たとえば、ASAROではプエブロで用いられてきた自治法が組織運営に援用される。決議事項はアサンブレアと呼ばれる集会にかけられて、メンバーの多数決で決定される。これは特定の人物に権力が集中しないための工夫である。他にも、彼らの組織では共有ということが尊重される。作品にはASAROの署名がされるが、作品がストリートに設置されると、それは作者やASAROのものではなく、民衆に属するとする。

第三章

抗議運動後のASAROと彼らの生産する作品が、メディアを媒介することでどのように象徴化されたのかを考察した。抗議運動後、左翼主義者たちは、民衆がオアハカの街を一時的に占拠した出来事を輝かしい民衆自治の達成として称賛し、ユートピア化した記憶をテキスト化していった。この現象を本稿では「神話化」と呼んだ。ASAROは活動の場を地元ギャラリーにも広めようとしたが、彼らの強い風刺性に注目したのは、むしろ欧米のキュレーターたちであった。彼らはASAROの作品を「抵抗のアート」や「草の根民主主義の実現」と評した。国外でのASAROの評価の高まりは、やがてオアハカ内部での再評価をもたらした。州政府に属する文化事務局は、ASAROにイベントへの参加を打診し、接近を行った。しかしながら、この背景には民主的な対話を行う開かれた文化事務局をアピールし、人気の高いASAROを、「神話化された抗議運動」の物語のもと文化資源化しようという思惑が見える。やがて、ASARO内部にも変化が起きた。メンバーたちは美術学校を卒業し結婚などを機に家庭をもつと、これまで以上に金銭収入を必要とするようになった。すると、作品のテーマはマンネリ化し、これまでの作品にみられたような先住民という言葉から想起されるイメージを裏切るような作品は少なくなった。これは、ASARO自体がメディアに流布する言説に加担するような作品を作るようになってしまったためではないだろうか。

第四章

抗議運動自体の記憶が人々から遠ざかってしまった現在、それを原動力として登場したASAROの活動も停滞している。しだいにASAROは、経験や知識を後続の世代へとひきつぐ必要性を感じるようになっていった。彼らは

2013年2月に、郊外先住民村落の若者たちをオアハカ市内に招き、アート制作のワークショップを開催した。筆者はこのワークショップに参加し、村落の若者たちがASAROの作品をどのように理解しているのかを調査した。参加者は29名で、テーマは「私のアイデンティティを描く」であった。若者たちの多くはASAROを郊外村落とオアハカ市を結び、さらに海外へとつながるコネクションとしてみている。米国へ仕事を求めて移住する村落住民も増えてはいるが、現実には外国へ行くことは難しく、彼らはASAROを通して「異文化」に触れる。他方で、彼らがワークショップで、異なるエスニック・グループの者たちと出会うとき、彼らは必然的に村落の代表を演じなくてはならず、自分の生まれ育った村落や自己のアイデンティティとは何かを考える場となる。ある若者はモヒカン・ヘアのサパタのポスターを見て、祖母が彼にサパタが彼の村を訪れたときのことを話してくれたと私に教えてくれた。そして、ASAROは過去によって現在を説明していると述べた。ASAROの作品は若者たちにとって単にポップなアイコンとして消費されているのではなく、現代社会に記憶を喚起するものとして存在しているのである。

終章

本稿の事例を検討するにあたっては、いったん「グローバル化」という認識から離れ、歴史学者ヘイドンホワイต์による「現代とは、過去と折り合いをつける時間である」という言葉をもとに再考した。メキシコの社会運動で、「革命」という言葉がたびたび持ち出されるように、メキシコ革命は運動の担い手の正統性を担保し、現在の不正を律するためのキーワードとして繰り返して現代に現れる。私がこれまで調査を行ってきたなかで、オアハカの人々は二種類の「過去」を生きていることを感じた。一方では、国家が描く先住民像や英雄像のように、民衆の統合シンボルとして国内外に発信されるような、為政者によって客体化された「過去」である。もう一方は、先住民村落の若者が祖母から聞いたサパタの話のように、記憶のなかで語り継がれる自文化の起源神話としての「過去」である。客体化された過去は、起源神話としての過去の存在なくしては統合シンボルとなりえないし、逆に起源神話としての過去は、可視化された統合シンボルとしての過去の存在によって、記憶の再認識・再編成が行われる。つまり、両者は互いに支え合いながら、革命の記憶を現代に生きるものにしていくのだ。ASAROはメキシコ革命で想像された「来るべき未来」が、いまだ到来していない現在の不正を糾弾するために、革命の担い手としての「先住民」を再生産している。